

今日の疫学 第2版

監修 青山英康

編集 川上憲人, 甲田茂樹

＜書評者＞ 坪野吉孝 東北大学大学院法学研究科

本書は1996年に出版された同書の初版を、23名の執筆者を迎えて大幅に改訂したものである。427ページからなる本文の約半分を占める「総論」では、疫学の概要から、因果論、研究デザイン、測定とバイアス、研究の実施、データ解析、倫理にいたる事項が取り上げられている。残りの半分を占める「各論」では、スクリーニング、感染症、がん、循環器、環境、産業疫学、社会疫学、精神保健、健康政策、さらに臨床疫学や臨床判断学にいたる多彩な分野が解説されている。

私自身は、とくに各論が面白かった。とりわけ、「循環器疾患の疫学」と「精神保健疫学」の部分は、世界と日本の研究状況が手際よく整理され、これまでの到達点と課題がみごとにまとめられている。「感染症の疫学」は、具体的なアウトブレイクの事例を用いた臨場感あふれる解説が興味深

かった。「社会疫学」と「健康政策への応用」は、新しい分野として世界的に発展する姿がよく理解できた。

本書の編者は、今回の第2版の編集にあたり、各論を再構成し拡充することを通して疫学の新しい動向をとらえ、「疫学の楽しさ」を前面に出すように心がけたと、序文で述べている。一人の読者として本書を通読して、編者のこのねらいは十分実現されていると感じた。

その一方、「読者」ではなく「教師」としては、気になる点もあった。例えば、基本的な概念の位置づけや説明が、執筆者のあいだで不揃いな場合がある。本書を教科書にして1章から順に講義していくと、「交絡（攪乱）は、バイアスの一種ですか、それともバイアスとは別の概念ですか？」「外的妥当性と外部妥当性と外部有効性の意味は同じですか？」といった

質問が、学生から出てくるかもしれない。

また、有意差検定や信頼区間による推定に関して、計算の手順についての説明はくわしいが、信頼区間自体の意味と解釈や、有意差検定の限界と問題点については、まとまった解説がない。総論の一部には、やや古びた記述や言葉足らずの説明も散見される。本書を教科書として利用する際には、こうした点に留意して、理解を補うことも必要だろう。

私はいま、法学部と医学部の学生や、現場の栄養士に疫学を教えている。その経験から、疫学の教育に対するニーズが、いろいろな分野で高まっているのを肌で感じている。「今日の疫学」というタイトルが示すとおり、本書からは、分化・発展する現代の疫学のダイナミズムがよく伝わってくる。本書を通して、たくさんの人が「疫学の楽しさ」に目を開かれることを期待したい。

●A5 頁472 2005年
定価3,990円
(本体3,800円＋税5%)
[ISBN4-260-10637-6]
医学書院刊